

曲げわっぱ

磨かれた伝統の技

秋田音頭に歌われている大館まげわっぱ。秋田杉を薄くはいて柾目(まさめ)取りし、独特の技術で曲げ輪にして桜の樹皮で縫い留めた、ぬくもりのある工芸品です。今年の郷土品まつりでの実演が行われました。ここでは曲げわっぱの製作工程を紹介しましょう。

まず、杉の丸太を製材して寸法取りをします。次に熱湯で煮ます。そして、「ごろ」と呼ばれる木を使って曲げ、木ばさみで固定して二昼夜ほど乾燥させます。接着剤で継ぎ目を張り合わせた後、目通しはりと呼ばれる刃物で穴あけ、桜の樹皮で縫い留め。底をはめ込んで、ヤスリをかけて仕上げます。最後にうるしを塗って完成です。

「ごろ」を使っての曲げ加工



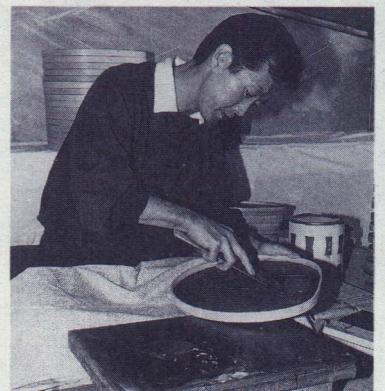
木ばさみでとじて乾燥させます



桜の樹皮を使って縫い留め



底入れ作業



丹念にうるしを塗ります



曲げわっぱの歴史

曲げわっぱは、きこりが杉を使って曲げ物の容器を作ったのが始まりとされています。江戸時代に大館城代の佐竹氏が、領内にある天然杉に着目し、武士の内職として奨励、発展させました。昭和55年には、国の伝統的工芸品の指定を受けています。

昔ながらの弁当箱やせいろのほか、ぐいのみ、小物入れなど現代感覚を取り入れた製品も生まれています。



ぬくもりがあふれる完成品